本　　社　　〒611-0041
京都府宇治市槇島町目川 70 番地の 1
E-mail：happy@kyoto-happy.co.jp

東京オフィス　〒104-0061
東京都中央区銀座 2-6-7
アルフレッドダンヒル銀座本店内
E-mail：dunhill@kyoto-happy.co.jp

U R L　www.kyoto-happy.co.jp
U R L　www.dunhill-happy.com

Happy TOKYO・KYOTO ケア・メンテ®
Happy・Care & Maintenance

2009年1月発行　Vol.14
着だおれ京都から発信

幸 sacchi

豊穣なる印章

小泉湖南堂 小泉景

目次

豊穣なる印章 4
古代から現代に伝わる風雅 6
磨ぐ、砥ぐ 8
ハンコの個性 10
死ぬまで弟子には負けられない 12
京都から世界を見る (4) 14

メソポタミアから京都にいたる印章

印章は紀元前 5000 年代にはメソポタミアで使われ始めたらしい。原始農耕社会で、石や貝殻や骨などに絵や文字を刻んで、粘土に押しつけていた。自分のものと他人のものを区別するために、印章を使った。

中国では夏王朝からといわれているが、現存する最古のものは殷の時代のもの。のち、秦の始皇帝が制度として定め、皇帝の使う印を「璽」、官印を「印」、将軍などが使うもの「章」とした。ここから、「印章」になった。

ハンコと呼ばれるようになったのは、判決書に捺される印のことを判と呼び、「判を行う＝判行」が転じて「ハンコ」になったらしい。

日本にハンコが本格的に伝わったのは奈良時代で、大化の改新ののち、天武天皇が中国唐の律令制度に倣って大宝律令を制定し、公文書には必ず印を捺すこととされた。

時代が下っていくと、行政としての官印が僧侶や文人たちの落款になり、武人商人たちの実印になり、江戸になって印章は庶民にまで普及していった。

明治政府は太政官布告で律令時代の官印の制度を復活させると同時に、京都の印章業者に天皇御璽と大日本国璽を作らせた。平安京以来途絶えることがなかった京印章は、これによってさらなる発展を遂げるようになった。

豊穣なる印章

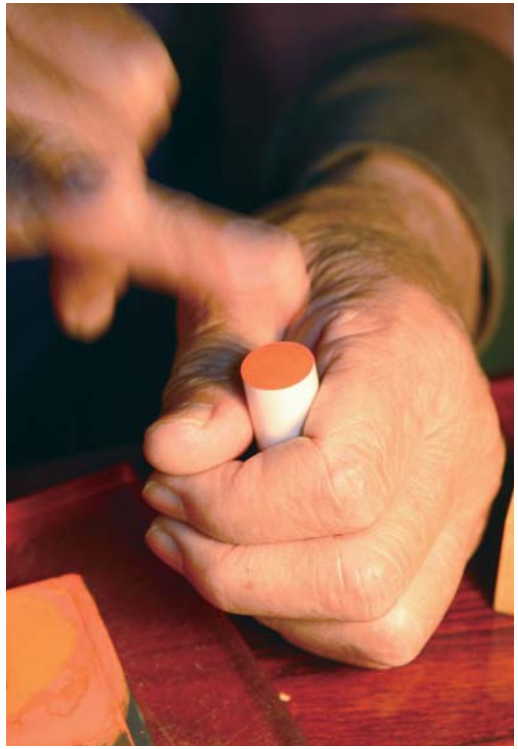
柘植の木を伐採して４，５年、四季の風にさらせばカチカチの堅木になる。印章の素材には、その柘植を用いる。

印材を真っ平らに整え、朱墨をくすり指で塗り、その朱い印面に細い筆で文字を書いていく。筆に力を入れたところ、抜いたところ、止める、はねる、はらう。「文字っちゅうもんは、生まれてくるもんなんです」と、印判師の小泉景さんはいう。

生まれてきた文字を浮き立たせるように、印刀を入れていく。鍛冶師が打った刃を竹で挟み、藤のツルで固定する。自家製の印刀がパリパリと乾いた音を立てて朱墨を塗った柘植の印材を削っていく。

印肉をまんべんなく塗り込み、ばれんを下敷きにした紙に押しつけ、そのままゆっくり三度四度と回して印章を紙から離すと、紙の上で朱い文字が踊りだす。

小泉さんは篆刻も書道も字源も修めた。道具もほとんど自分で作る。印肉すらも独自のブレンドで朱色を醸し出す。だから、小さな印面が、実に豊かな風格を感じさせる。



古代より現代（いま）に伝わる風雅

日本で最初の本格的法体系である大宝律令（701年）によって、「役所で取り扱う文書には印鑑を押すこと」、と定められた。日本人が印鑑を使うようになったのは、それ以来である。

794年、遷都により都になった京都では、天皇御璽（天皇の印）や役所の官印などが作られた。当時は今と違って、印を持つことは上階級の人間にしか許されていなかった。しかもほとんどが、銅を溶かして鋳造された印章だった。

鎌倉時代になると中国・宋との交流が盛んとなり、宋の風雅な文化に魅せられた僧侶や文人の間には宋風の落款印・書物印などが流行った。

戦国時代に入ると、武将たちが権力や威厳を印章で表現した。たとえば武田氏は龍を、上杉氏は獅子を、北条氏は虎を印に彫った。同時に、商人たちは実名印（後の実印）を使うようになった、そして江戸時代には庶民にも広まり、印章を彫る印判師は、京都で増えていった。

その後、明治６年の太政官布告で一般庶民にも実印の使用が認められた。当時は犯罪防止のために、作った実印を役所に届ける義務があり、それも印判師の大事な仕事だった。今でも制度として残っている印鑑登録は、その名残である。

京印章は、印章最盛期の中国・漢の作風を受け継ぎ、伸びやかな直線、素朴で清楚、典雅な書体を特徴とする。対して江戸の印章は、曲線が多く複雑で、丸みを帯びた書体となっている。たとえば、1000 円札の表側の「総裁之印」が京都風、裏側の「発券局長」の印が江戸風。比べて眺めてみるのもまた楽しい。

磨く、砥ぐ

小泉景さんは、一つひとつの工程を丁寧に完璧に進めていく。文字の彫りは当然のこと、道具である印刀、素材である印材の下準備も、必ず自分の手で納得がいくまで仕上げる。

仕入れたての印材は、素人目には印面もきれいに仕上げられている。それでも小泉さんは、印材が真っ平らになるように、印面のぐるり（縁）が丸くならないように、何種類かの紙ヤスリで丁寧に整える。機械なりに正確に整えられた印面でも、小泉さんには「毛羽立っている」と見抜けるからだ。

作業机に敷いた紙ヤスリに印材をあて、手をゆっくり動かして磨いていく。素人がやると、印材を持つ親指と人差し指の力が均等に入らない。したがって、印面が微妙に傾き、ぐるりが丸くなる。印面が鏡面のようにならなければ、正確に印を押すことができなくなる。ぐるりがしっかりと立たなければ、印鑑として成立しなくなる。この作業が最も神経を使い、職人として最高の腕の見せ所である。

印刀は、刃の部分だけを鍛冶屋に作ってもらう。それを割竹で挟み、持ちやすいよう籐のひごでしっかり巻いてこしらえる。刃の幅や形が違うものを何種類か使い分け、刃先を押し出すように彫り進めていく。切れ味鋭い印刀でなければ、いい仕事はできない。

砥ぎを習得するだけでも2、3年はかかる。弟子の彫る音を聞いただけで、印刀の砥ぎが甘いかどうかがとわかるという。

磨く、砥ぐ。下準備こそ大事だ。

ハンコの個性

「ハンコには個性のあるものと、ないものがありますね」

それは、彫られた文字の線の味で決まる。小泉さんは続ける。

「たとえば、私が定規をあててすっと引いた線と、筆だけで引いたのとではやっぱり味が違います。筆に力の入ったとこ、力の抜いたとこ、そういういろんな書き方があって、文字っちゅうのは生まれてくるんです」

どんな文字でも、全体として同じ太さの線では形づけられていない。筆の力の入れ具合で線は膨らんだり細くなる。均一の幅では、文字らしくは見られないという。

印鑑の文字には彫り手の性格が表れる。おとなしい人が彫ったらおとなしく、まったりとした線の文字になる。荒っぽい性格の人ならば、勢いのある線になる。

さらに小泉さん自身、年齢とともに彫る文字が変化してきた、という。

「若いときは、きれいな形、きれいな線。年齢(とし)いってくると、手が震えたりしてくるけど、その中に、『寂(さび)』っちゅうもんがでてくるわけですわね」

「今は、私の人生そのものがゆっくり過ごしていきたいという志向やから、文字の形も変わってきました。字の角が取れるんですわ」

印面を磨き、朱墨を塗り、筆を入れていく。

その文字の一線一画に個性が出る。

「やっぱり、個性出さなんだら面白くないでしょう。ハンコにしても道具にしても、自分で工夫して味付けせな。人の真似ってもんは、ある一定のところまでは近づけますけど、近づいてそれで終い。そこから先は自分で努力して個性を作っていくんです。個性っちゅうもんは、なんぼでも伸ばせますわ」

死ぬまで弟子には負けられない

小泉さんは三代目。この道に入ってまず修行に出た。父や親戚の店では「勝手が出来すぎるから」と。ところが、そこの師匠が習い始めて２～３年で亡くなった。以降、印章づくりに関しては、ほとんど独学だという。

篆刻と書道は、師匠について習った。篆刻は３人、書道は２人の師匠に師事したが、師匠といっても手取り足取り教えてくれない。出来上がったものを見せにいく。いいものなら「これや！」。悪ければ「こんなんあかん。やり直し」それだけだった。

「せやから独学せななら ん。教えてくれないから、自分で考えてやらな」

字源もよく勉強した。字の成り立ちを知れば、その字の本当の意味をきちんと理解でき、表現できて、お客さんにも説明できる。修行当時は、一日中勉強して、遊ぶ暇もなかった。負けん気が強く、早く一人前になりたい、その一心だった。

今、小泉湖南堂には週に一回、若い印章づくりの職人が集まる。若いといっても小泉さんより若いというだけで、みんな一家を成す職人たちだ。

「ここでようけやったって、上手になるもんやない。我が家へ帰ってからの訓練、それが大事。ここは一応、教えるってことだけ」

小泉さん自身、まだ修行の最中だという。

「（弟子たちが）10年、20年の経験を積み重ねてきたかて、わしはわしでさらに積み重ねていく。だから、わしを飛び越そう思たら、死んでからでなかったらいかん」

小泉さんは今日も、印章をつくっていく。

京都から世界を見る (4)

方囲されたアイデンティティ

印章は「象徴（シンボル）」の１つの形で、メソポタミアやエジプトでも中国でも、最初は王侯・貴族がその権力や権威を背景に、ある文書なり何なりを「これは私が認めたものだ」と天下に知らしめる手段だった。西洋では、しかし、それがあまり発展することはなく、今では手紙の封印やワインの品質保証のための封蝋にわずかに名残を止めるだけである。中国で印章が一個の文化ジャンルと言えるほどに大きく花開いたのは、漢字という表意文字の持つ豊穣な象徴性が、狭いスペースに権威の誇示や権利の主張や責任の所在といった強烈なアピールを彫り込んでいく印章の凝縮性とマッチしていたからに違いない。実際、事典などによると、印章文化が残っている国・地域として挙げられるのは、中国、日本、朝鮮半島、台湾、ベトナム、それに東南アジアの華僑社会で、つまりは広義の漢字文化圏である。

ところがこの中で、広く一般庶民が印鑑登録をして本人認証の公的手段として使う制度が続いているのは、日本、韓国、台湾だけで、ご本家の中国本土では美術工芸の技術としては存続しているけれども一般が日常に印鑑を用いることはないらしい。日本には奈良時代に印章が中国から伝わって、最初は皇室の、平安時代を通じて貴族階級の、鎌倉時代に武士階級の、そして江戸時代を通じて広く町人や百姓の日用の道具として大衆化した。このように、中国などから伝わった文物が貴族から武士、そして一般庶民へと大衆化していく中で、その市場拡大に支えられて職人の技術が発展・深化し、中国モデルを超えるほどの多様さや精密さを実現して日本独自の境地を開いていくというのは、文化の伝播と受容のパターンであるけれども、印章も例外でない。7000 年に及ぶ印章文化の歴史が１ないし数センチ平米の印面に凝縮する。そこに日本人のアイデンティティが宿るのである。

高野孟
たかのはじめ　1944 年、東京生まれ。早稲田大学卒業後、通信社を経てフリージャーナリストに。「インサイダー」編集長、早稲田大学と京都造形芸術大学で客員教授、日本で初めてのブログ・ジャーナリズムサイト「The Journal」http://www.the-journal.jp/ を務める。

幸　vol.14

平成 21 年 1 月発行

制作
亀本文子（通信教育部芸術学部デザイン学科 4 年）
坂田和陽（芸術学部美術工芸学科 2 年）
田川怜奈（芸術学部情報デザイン学科 3 年）
吉尾枝里子（芸術学部情報デザイン学科 3 年）

写真
人羅秀二

指導
中西洋一（京都造形芸術大学准教授）
村田信之（京都造形芸術大学客員教授）
米原有二（サクラエディトリアルワークス）

編集
京都造形芸術大学
606-8271　京都市左京区北白川瓜生山 2-116
www.kyoto-art.ac.jp

発行人
橋本英夫（株式会社ハッピー）